

青年期における傷つけあい回避傾向と信頼感の関連

浄沼 和浩*・伊藤 大輔*

本研究の目的は、青年期における傷つけあうことを避ける傾向と信頼感の関連を検討することであった。4年制大学に在学する大学生251名（男性85名、女性166名、平均年齢20.04±1.45歳）を対象として、「傷つけ回避・礼儀」、「距離確保」、「傷つけられ回避」の3因子からなる傷つけあい回避尺度と、「不信」、「自分への信頼」、「他人への信頼」の3因子からなる信頼感尺度を用いた質問紙調査を実施した。信頼感尺度についてクラスタ分析を行い、他人への信頼感が高い「①他人への信頼群」、不信感が高い「②不信群」、自分への信頼感と他人への信頼感がどちらも高い「③信頼群」が抽出された。その後、各群を独立変数、傷つけあい回避傾向を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、「距離確保」と「傷つけられ回避」は、「不信群」が「他人への信頼群」および「信頼群」と比較して有意に高かった。しかし、「傷つけ回避・礼儀」においては、有意な群間差はみられなかった。以上のことから、不信感が高い者は、友人との心理的距離を確保し、傷つけられることを避ける傾向があることが明らかとなった。また、友人を傷つけることを回避する傾向は、信頼感、不信感の高低には左右されない、ある程度一貫した態度であることが示唆された。

キーワード：青年期、友人関係、傷つけあい回避傾向、信頼感

問題・目的

青年期における友人関係は、お互いの内面を開示し、密接な関わり合いをするような関係が特徴的とされてきた（西平1990）。例えば、嶋（1991）や福岡（2010）は、日常のストレス状況で、多くの大学生は親しい友人からのソーシャル・サポートを受けていることを明らかにしている。また、松井（1990）は、青年期における友人は自分を支えてくれ、自尊心を高揚させたり孤独感を癒してくれたりするような精神面の安定をもたらす存在であり、行動の適切さなど社会的スキルの場を提供してくれる存在、自己理解を深めてくれる存在であるとしている。つまり、青年期における友人は、精神的支えや安心を与えてくれる存在でありながら、時にはモデルとなったり、アドバイスをくれるような存在であるといえる。

しかしながら、近年、その友人関係が表面的で

あることが指摘されている。例えば、上野・上瀬・福富・松井（1994）によれば、友人との心理的距離が大きい一方、同調性が強い傾向を示す表面群が存在することが指摘されている。この群は同調行動を行うが、集団中心の生き方を望んでいたり、協同的であるわけではなく、心理的には友人たちと離れていて、ただ集団から外れないようにと群れ集まっているだけであると推察され、「群れ志向」と呼称すべき傾向をもっているとされている。このような特徴を持つことから、松下・吉田（2007）は、現代青年の自己と友人への関わりの特徴を、表面が整ってポジティブなものに見えるという「見映え」が重視される傾向があり、その背後に「深くかかわる」ことでネガティブ（に見えるような）面に向き合ったり、傷ついたりすることを恐れる傾向があるとしている。つまり、現代の青年は相手を傷つけること、また、自分が傷つくことを恐れ、親密な関係になることを恐れている傾向があると言える。

* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

以上のような友人関係における表面的な側面に関連するものの一つとして、信頼感が挙げられる。天貝（2001）によれば、青年期は、何らかの不信体験、または自己への強烈な意識による不信感の芽生えから、不信感が高まるが、他者と密接に関わり、安心感を得えながら、自らの内省を通して不信感を克服して行く時期であり、青年期における友人関係と信頼感には密接な関連があることが考えられる。例えば、友人関係と信頼感との関連を検討した松永・岩本（2008）は、友人との付き合いにおいて、深くありのままの自分で接している者は、基本的信頼感が高いことを明らかにしている。また、齊藤・野中（2011）は、友人との閉鎖的な関わり方と、不信感に正の相関、他人や自分への信頼と負の相関があることを明らかにしている。さらに、信頼感と友人と精神的な距離を保とうとしたり、関わりに不安を感じていることとの関連を明らかにしている。このように、友人との関係性や関わり方と信頼感との関連は明らかになっているものの、現代青年の友人関係の特徴として挙げられる、傷つけあうことを避ける傾向と信頼感との関連を検討した研究は見られない。

そこで本研究では、現代青年の特徴的な友人関係として、傷つけあうことを避ける傾向を取り上げ、信頼感とどのように関連しているかを検討することを目的とする。

方法

対象者

4年制大学に在学する大学生296名を対象に、質問紙調査を実施した。このうち、回答に不備がみられなかった251名（男性85名、女性166名、有効回答率＝84.8%）の回答を分析対象とした。対象者の平均年齢は20.04($SD=1.45$)歳であった。

手続き

講義終了後、質問紙を配布し、その場で回収した。また、縁故法によって質問紙を配布し、回収した。調査は2018年12月に実施した。

質問紙の構成

1. フェイスシート

性別、年齢の記入を求めた。

2. 傷つけあい回避傾向

岡田（2012）が作成した、傷つけあい回避尺度を現代の大学生の友人への関わりに関する現状に沿う形で一部改変して使用した。具体的には項目番号7「メールにはすぐ返信するようにする」に、現在のコミュニケーションツールとして幅広く使用されていると考えられるSNSアプリのLINEを加え、「メールやLINEにはすぐ返信するようにする」とした。本尺度は、現代の青年の特徴として挙げられる傷つけあうことを避ける傾向そのものに焦点を当て作成された尺度である。「傷つけ回避」、「礼儀」、「距離確保」、「傷つけられ回避」の4因子からなり、全33項目。最も親しい同性の友人を想定させ、普段どのように付き合っているか、どのような感じ方をしているかを「全くあてはまらない」～「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

3. 信頼感

天貝（1995）が作成した、信頼感尺度を使用した。本尺度は、信頼の対自的側面、対他的側面に着目し、信頼感を多次的に測定する目的で作成された尺度である。「不信」、「自分への信頼」、「他人への信頼」の3因子からなり、全24項目。自分の考えにどの程度あてはまるかを、「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」の6件法で回答を求めた。

倫理的配慮

調査を実施するにあたり、調査への参加は自由であること、個人が特定されることはなく結果は統計的に処理されることを伝え、その旨を質問紙にも記した。

結果

傷つけあい回避尺度の検討

傷つけあい回避尺度において、項目分析を行ったところ、項目21「約束をやぶらない」、24「友だちの話をきちんと聞くようにする」、25「自分が悪いと思ったらすぐにあやまる」に天井効果が

みられたため、先行研究と同じ因子構造を持つか確認するために確認的因子分析を行った。その結果、GFI=.70, AGFI=.66, CFI=.76, RMSEA=.09, AIC=1640.3であり、モデルの適合度が低いと判断したため、探索的因子分析を行った。平均値±1SDを基準とし、先程天井効果がみられた3項目を削除し、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、スクリープロットから3因子構造を想定し、再度分析を行ったところ、因子負荷量が.35以下の項目がなく、複数の因子に.35以上の負荷量を示す項目がなかったため、解釈可能性が高いと判断し、3因子を抽出した (Table 1)。さらに、モデルの適合度を確認するため、再度確認的因子分析を行ったところ、

GFI=.83, AGFI=.80, CFI=.87, RMSEA=.08, AIC=760.74と改善したため、本研究においては3因子構造を採択し、以下の分析を行うこととした。また、岡田 (2012) を参考に第一因子を「傷つけ回避・礼儀」、第二因子「距離確保」、第三因子を「傷つけられ回避」とした。さらに、内的整合性を検討するためCronbachの α 係数を算出したところ、「傷つけ回避・礼儀」は $\alpha = .87$ 、「距離確保」は $\alpha = .83$ 、「傷つけられ回避」は $\alpha = .87$ であり、一定の内的整合性があることが確認された。

信頼感尺度の検討

信頼感尺度について、項目分析を行ったところ、どの項目においても天井効果、床効果がみられな

Table 1 傷つけあい回避尺度における探索的因子分析の結果

項目	F1	F2	F3
第Ⅰ因子：傷つけ回避・礼儀 ($\alpha = .87$)			
10. 友だちの気分を害するようなことを言わないようにする。	.80	-.05	.08
23. 友だちを傷つけないようにする。	.77	.00	-.02
4. いきすぎた冗談を言わないようにする。	.74	.21	-.22
15. 友だちの気持ちを察するようになる。	.71	.02	-.07
9. 友だちにやさしくするよう心がける。	.70	-.11	.11
28. 友だちの気持ちに気をつかう。	.69	-.16	.13
1. 友だちの言うことを否定しないようにする。	.46	.18	.05
8. 気に入らないことを言われても怒らないようにする。	.41	.12	.11
16. 場の空気を読んで会話をする。	.40	-.01	.29
22. 友だちの欠点には触れないようにする。	.37	.26	.14
第Ⅱ因子：距離確保 ($\alpha = .83$)			
12. 自分の内面に踏み込まれないように気をつける。	-.05	.91	-.10
33. 自分のプライベートなことには踏み込まれないようにする。	-.08	.78	.00
13. あたりさわりのない会話ですませる。	-.08	.76	.08
18. 友だちの内面に踏み込まないようにする。	.16	.59	.07
27. 友だちと適度な距離を置くようにする。	.22	.54	-.19
第Ⅲ因子：傷つけられ回避 ($\alpha = .87$)			
5. 友だちから「つまらない人」と思われないように気をつける。	.08	-.11	.70
20. 友だちからバカにされないように気をつける。	-.11	.21	.70
19. 会話の間 (ま) があかないように気をつける。	-.18	.20	.66
29. 友だちの前で恥をかかないように気をつける。	-.13	.23	.66
30. 共通の話題をさがすようにする。	.17	-.24	.64
2. 友だちからどう見られているか気にする。	.11	.02	.61
14. 友だちとの意見が対立しないよう気をつける。	.11	.23	.55
7. メールやLINEにはすぐ返信をするようにする。	.09	-.17	.45
31. 真剣な話を真面目に話さないようにする。	.03	.08	.43
17. 友だちから傷つけられないようにふるまう。	.21	.26	.42
因子間相関	1	2	3
		.29	.57
			.65

かったため、先行研究と同様の因子構造を用いて、以後の分析を行った。内的整合性を検討するため Cronbachの α 係数を算出したところ、「不信」は $\alpha = .83$ 、「自分への信頼」は $\alpha = .79$ 、「他人への信頼」は $\alpha = .85$ であり、一定の内的整合性があることが確認された。

各尺度の基本統計量および相関

まず、傷つけあい回避尺度、信頼感尺度のそれぞれの下位尺度の平均値と標準偏差を算出した (Table 2)。次に、男女で平均値に差があるかを確かめるため、 t 検定を行った結果、「傷つけ回避・礼儀」($t = 4.29, p < .01$)、「不信」($t = 1.19, p < .05$)、「他人への信頼」($t = 2.39, p < .05$)において有意差がみられた。しかし、男性が85名と女性の約半分しかおらず、分析に耐えうるデータ数を確保するために、以下の分析は男女を分けずに行うこととした。

次に、各下位尺度における相関係数を算出した (Table 3)。その結果、「傷つけ回避・礼儀」と「距離確保」、「傷つけられ回避」、「自分への信頼」において有意な正の相関、「距離確保」において、「傷つ

けられ回避」と「不信」と有意な正の相関、「自分への信頼」、「他人への信頼」と有意な負の相関、「傷つけられ回避」において「不信」と有意な正の相関、「不信」において、「自分への信頼」、「他人への信頼」と有意な負の相関、「自分への信頼」において、「他人への信頼」と有意な正の相関がみられた。

調査対象者の信頼感による類型化

不信得点、自分への信頼得点、他人への信頼得点を標準化し、Ward法によるクラスタ分析を行った。解釈可能性を考慮して、3クラスタを採用した (Figure 1)。Figure 1から、各クラスタを命名した。クラスタ1は、クラスタ全体で最も高い値を取った変数がなかった。しかし、他人への信頼はクラスタ2よりも高く、不信得点、信頼得点は他のクラスタよりも低い値を取ったため、クラスタ1は他人への信頼が高い群と判断し、「他人への信頼群」とした。クラスタ2は、他のクラスタよりも不信得点が高かったため、「不信群」とした。クラスタ3は、他のクラスタよりも自分への信頼、他人への信頼が高かったため、「信頼群」とした。

次に、各クラスタの特徴を見るために、各クラ

Table 2 各下位尺度の男女得点比較

	男性		女性		効果量 Choen's <i>d</i>	<i>t</i> 値
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
傷つけ回避・礼儀	3.52	0.79	3.94	0.57	.60	-4.32 **
距離確保	2.96	0.91	2.85	0.87	.01	0.98
傷つけられ回避	2.92	0.88	2.93	0.78	.01	-0.02
不信	3.38	0.83	3.25	0.78	.21	1.19 *
自分への信頼	4.02	0.84	4.19	0.69	.22	-1.67
他人への信頼	4.16	0.82	4.39	0.69	.30	-2.39 *

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 3 各下位尺度の相関係数

	1	2	3	4	5
1. 傷つけ回避・礼儀	—				
2. 距離確保	.38 **	—			
3. 傷つけられ回避	.62 **	.61 **	—		
4. 不信	-.03	.26 **	.20 **	—	
5. 自分への信頼	.18 **	-.17 **	-.03	-.26 **	—
6. 他人への信頼	.09	-.27 **	-.09	-.52 **	.71 **

** $p < .01$

スタを独立変数、不信得点、自分への信頼、他人への信頼得点をそれぞれ従属変数とする、一元配置分散分析を行った。その結果、すべての下位尺度において主効果が有意だった（不信： $F(2, 248) = 96.29, p < .001$ 、自分への信頼： $F(2, 248) = 104.16, p < .001$ 、他人への信頼： $F(2, 248) = 162.41, p < .001$ ）。そのため、多重比較（Turkey法）を行った。結果（Table 4）、不信得点は、クラスタ2がクラスタ1, 3よりも有意に高かった。また、自分への信頼得点は、クラスタ3がクラスタ1, 2よりも有意に高かった。以上より、各クラスタの命名については、ある程度妥当であることが示唆された。

クラスタ間の傷つけあい回避傾向の比較

各クラスタの傷つけあい回避傾向の特徴を比較するために、各クラスタを独立変数、傷つけあい回避を従属変数とする一元配置分散分析を行った。

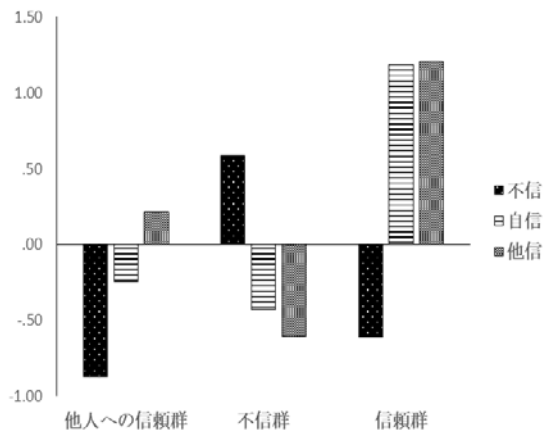


Figure 1 信頼感におけるクラスタ分析の結果

その結果、距離確保、傷つけられ回避において主効果が有意だった（距離確保： $F(2, 248) = 13.57, p < .001$ 、傷つけられ回避： $F(2, 248) = 4.71, p < .05$ ）ため、多重比較（Turkey法）を行った（Table 5）。その結果、「距離確保」は、他人への信頼群に比べて不信群が有意に高く、信頼群に比べて不信群が有意に高かった。「傷つけられ回避」は、信頼群に比べて不信群が有意に高かった。

考察

本研究の目的は、傷つけあうことを避ける傾向と信頼感との関連を検討することであった。そこで、信頼感におけるクラスタ分析による群分けを行い、傷つけあい回避との一要因分散分析を行った。その結果、不信感が顕著に高い群では距離を確保し、傷つけられることを回避する傾向が高いことが明らかとなった。また、距離を確保することは、自分への信頼感による差は見られず、傷つけることを避ける傾向においては、信頼感による差が見られないことが明らかとなった。

まず、信頼感におけるクラスタ分析を行い、3つのクラスタを抽出し、それぞれのクラスタの特徴を最も表すよう、それぞれを「他人への信頼群」、「不信群」、「信頼群」と命名した。このうち、「不信群」は対象者の半数以上が属した。天貝（2001）によれば、青年期は、他者への不信感が強まる時期であり、相手に対しての不信を感じながらもそれを上回る自分、他人への信頼感を獲得、確立していく時期としている。すなわち、本研究における対象者も青年期にあることから、不信感が高

Table 4 各クラスタと信頼感得点比較

	1. 他信群 (n=51)	2. 不信群 (n=139)	3. 信頼群 (n=61)	F 値	多重比較
不信	2.60(.28)	3.77(.46)	2.81(.37)	96.29	1, 3 < 2 ***
自分への信頼	3.94(.59)	3.81(.64)	5.01(.58)	104.16	1, 2 < 3 ***
他人への信頼	4.47(.80)	3.86(.38)	5.21(.35)	162.40	2 < 1 < 3 ***

() 内は標準偏差 *** $p < .001$

Table 5 各クラスタと傷つけあい回避得点比較

	1. 他信群 (n=51)	2. 不信群 (n=139)	3. 信頼群 (n=61)	F 値	多重比較
傷つけ回避・礼儀	3.78 (.69)	3.77 (.65)	3.88 (.67)	0.499	n.s.
距離確保	2.67 (.69)	3.13 (.83)	2.51 (.83)	13.576	1 < 2 **, 3 < 2 ***
傷つけられ回避	2.76 (.66)	3.07 (1.00)	2.75 (.84)	4.713	3 < 2 *

() 内は標準偏差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

まっている時期と言え、信頼感における発達的特徴を反映している結果であると考えられる。また、「不信群」だけではなく、「他人への信頼群」、「信頼群」も見られることから、調査時の対象者は、まさに信頼感が不信感を上回る時期にあったことが推察される。

次に、傷つけあうことを避ける傾向と各クラスターの関連を検討した結果、距離確保においては、「不信群」が、「他人への信頼群」、「信頼群」よりも有意に高く、傷つけられ回避においては、「不信群」が「信頼群」よりも有意に高かった。すなわち、自分や他人への不信感が高い群においては、(最も親しい同性の)友人から距離を確保し、傷つけられることを回避する傾向が高いことが明らかとなった。斉藤・野中(2011)が、警戒心が強ければ互いをより深く知ろうとはせず、自分が傷つかないよう意思の表明を控えてしまいがちであると述べている通り、他人への不信感が高いと、相手と関わりを持とうとするよりも、傷つけられるのではないかという思いが強くなり、距離を確保しつつ様子を見ながら関わろうとすることが推察される。

また、「他人への信頼群」と「信頼群」では自分への信頼得点に有意差がみられていることから、距離を確保する傾向は「自分への信頼」の高さ、もしくは低さは関連していないことが明らかとなった。斉藤・野中(2011)は、友人関係において、親密な友人との間でも自己の過信はかえって相手との意思疎通を困難にするという予見の上での配慮があると推測しており、自分に対して信頼感を持っていても、相手に対しての配慮として距離を確保することが考えられる。また、姜・南(2014)は「自己信頼」は、友人関係満足に直接的に影響を及ぼすというより、他者との関りの中で、他者又は自己を信頼する経験によって得られた自己信頼が、友人関係満足につながるのではないかと述べている。したがって、不信が高い群では、他者や自己を信頼する経験が乏しいために、結果的に他者や自己への信頼感よりも不信感が高まり、それが距離を確保するという行動に結びつ

いていることが考えられる。

次に、傷つけ回避・礼儀においては、各クラスター間で有意な差がみられなかった。松下・吉田(2007)が現代青年の友人関係の特徴として、ネガティブな体験や傷つきをお互いしないように気遣い、表面上の暖かさを保とうとすることを挙げており、信頼感が高いものは、礼儀として相手を傷つけないようにふるまい、不信感が高いものは、傷つけられることを恐れて、相手を傷つけないようにふるまうことが考えられる。つまり、友人に対して礼儀として傷つけないようにする傾向は、ある程度一貫した態度であり、信頼感には左右されないことが明らかとなった。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。まず、本研究では、対象者の男性の数が少なく、男女別の検討を行うことができなかった。先行研究では、男女で友人関係の特徴が異なることが明らかとなっている。例えば、落合・佐藤(1996)は、女子では友人と理解しあい、共感しあい共鳴しあうといった、お互いが一つになるような関係を望んでおり、男子では、自分に自信をもち、友だちと自分は異なる存在であるという認識をもって友だちづきあいをしていると推察している。本研究における t 検定の結果からも、傷つけることを回避する傾向は女子が有意に高いことが明らかとなっており、今後は性別の影響を考慮にいたした検討を行う必要がある。また、本研究においては、信頼感を測定する際に、具体的な人物を想定して回答するよう教示を行わなかった。姜・南(2014)は、従来の信頼感を測定する尺度は、信頼感を被験者に明確に想起させて尋ねていないことを指摘しており、「信頼」とは、信頼する対象を必ず伴うものであることを考慮すると、本研究における測定では、妥当性の面に問題があることが考えられる。したがって、今後は、信頼する対象を明確に設定した上で信頼感を測定する必要がある。

引用・参考文献

天貝由美子(1995). 高校生の自我同一性に及ぼ

- す信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- 天貝由美子 (2001). 信頼感の発達心理学——思春期から老年期に至るまで—— 新曜社
- 福岡欣治 (2010). 日常ストレス状況体験における親しい友人からのソーシャル・サポート受容と気分状態の関連性 川崎医療福祉学会誌, 19, 319-328
- 姜 信善・南 朱里 (2014). 信頼感が友人関係満足に及ぼす影響についての検討 人間発達科学部紀要, 9, 1-15
- 松井豊 (1990). 友人関係の機能 佐藤耕二・菊池章夫 (編) 社会化の心理学 ハンドブック 川島書店 283-296
- 松永真由美・岩本澄子 (2008). 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究, 7, 77-86
- 松下姫歌・吉田芙悠紀 (2007). 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面 広島大学大学院教育学研究科紀要, 56, 161-169
- 西平直喜 (1990). 成人になること——生育史心理学から—— 東京大学出版会
- 岡田努 (2012). 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成——傷つけあうことを回避する傾向を中心として—— 金沢大学人間科学系研究紀要, 4, 19-34
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65
- 齊藤英里香・野中弘敏 (2011). 高校生・大学生の友人関係における自己切替と信頼感——「親友」観との関連で—— 山梨学院短期大学研究紀要, 31, 47-59
- 嶋信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28

The relationship between tendencies to avoid hurting each other and sense of basic trust in adolescence

Kazuhiro Kiyonuma*, Daisuke Ito*

*Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education

The purpose of this study was to examine the relationship between the tendency to avoid to hurt each other in adolescence and their sense of trust. Targeting 251 university students (85 males, 166 females, average age 20.04 ± 1.45 years old), we conducted a questionnaire. "The tendency to avoid to hurt each other" scale includes three factors, "avoidance to hurt friends and courtesy", "ensuring distance", and "avoidance to be hurt by friends". And "The sense of trust" scale includes three factors, "distrust", "trust to oneself" and "trust to others". As a result of a cluster analysis of sense of trust and a one-factor ANOVA of "the tendency to avoid to hurt each other" to each cluster, it became clear that groups with high "distrust" were more likely to keep distance and avoid to be hurt by friends. Furthermore, it became clear that there was no difference in the tendency to avoid to hurt friends depending on the different type of the sense of trust. From the above, it became clear that those with high distrust tend to keep a psychological distance from their friends and avoid to be hurt. In addition, it was suggested that the tendency to avoid hurting friends is a somewhat consistent attitude that is not influenced by the level of trust and distrust.

Key Words : Adolescence, Friendship, Avoid hurting each other, Sense of basic trust